

學 報

Kobe College Bulletin

ISSN0389-164X

NO. 170

2014. 3. 11

神戸女学院

学報委員会

神戸女学院の真価が問われている

理事長・院長・中高部長 森 孝一

2010年に理事長・院長をお引き受けしてから、4年が経ちました。院長としての任期の1期目が終了します。昨年の院長選考で再任へのご支持をたまり、4月から2期目の4年間が始まります。どうぞ、よろしくお願い申し上げます。

4年前の院長就任式の時の「就任の辞」のなかで、次のようにお話しいたしました。「神戸女学院の資産は、卒業生・同窓生に対する社会的評価です。表現を換えれば、『神戸女学院ブランド』の力と言えるかも知れません。……この『神戸女学院ブランド』の中身とは何なのか？これはなかなか難しい問いです。神戸女学院の教育、環境、伝統などによって形作られてきたものであり、神戸女学院の『学風』といえることができるのかも知れません。『愛神愛隣』のキリスト教精神と、ヴォーリズ博士の設計による美しいキャンパスの中で学んだ卒業生たちが、美しさを備えた女性であることは確かです。しかし、その美しさは京都弁で言う『はんなり』とした美しさではありません。『気高い』美しさと言いますか、ときには、周りにいる男性をタジタジとさせるような、ある種の強さを持った美しさです。世間の風潮に流されることなく、自分で考え、自分の考えを形成し、自分を表現する力を備えた女性。それが神戸女学院の卒業生であると評価されてきました。言い換えるならば、本物の教養を備えた女性を養成すること、これが神戸女学院の教育目標であると考えています。」

この思いは、4年を経過した今も、まったく変わっていません。今後4年間の院長としての私の目標とさせていただきますと願っています。

「神戸女学院ブランドとは何か」、「神戸女学院の



イメージとは何か」についての理解は、年代によってかなりの違いがあるように思います。「就任の辞」でお話しした私の神戸女学院のイメージやブランド・イメージは、現在の在学生の皆さんや教職員の皆さんにとっては、実感のないものであるのかも知れません。

現在の神戸女学院大学生についての社会的イメージは、「気高い美しさ」や「周囲の男性をタジタジとさせるような、強さを持った美しさ」よりも、「かわいらしさ」や「お嬢様」といったイメージが一般的になっているのではないのでしょうか。私は古い年代の「神戸女学院ファン」の一人として、かつての「神戸女学院ブランド」にこだわりたいと思っています。

近年の教育を巡る社会状況を考える時、私は「いま神戸女学院の教育の真価が問われている」という

思いを強くしています。ご存じのように、神戸女学院大学は厳しい大学間競争のただ中に置かれています。建学の精神であるキリスト教に基づいた全人的教育、すなわち、本当の意味での教養を身につけるためのリベラルアーツ教育という神戸女学院の教育は、受験生の心をつかんでいるとは言えません。

何を基準に受験生は大学を選んでいるのだろうかと考えてみると、「就職に結びつく学びができるか、就職に有利な資格が取れるか」という実学志向が支配的であり、教養教育やリベラルアーツ教育が本当は将来の仕事や人生にとって、実学以上に重要であり力になるのだという理解を持っていただくことができていません。これは私たちの発信力の不十分さが原因なのかも知れません。また、実際にリベラルアーツ教育が優れた人材を養成することができるのだということを納得してもらえような、教育のコンテンツとその成果を、受験生に見える形で示していくことが重要であると考えます。

神戸女学院の真価が問われているのは、大学だけではなくありません。実学志向や目先の成果を重視する傾向は、どのような基準で中学校を選ぶかという、小学校段階にまで広がっています。

近年、中学受験における関西の女子の勢力図に変化が見られると言われています。神戸女学院中学部は絶対的な支持を受けて、優秀な入学者を集めてきましたが、成績上位の受験生が神戸女学院と並ぶ選択肢とするような中学校が、複数校現れてきました。それらの学校は大学受験を目標として掲げ、実際に成果をあげ、その成果を公表することによって、受験生を集めています。未だ成果をあげていない新設の中学校であっても、「医学部への進学をめざす」特別コースを中学の段階で設けることによって、成績上位の受験生を獲得しようとする学校が登場し、受験生の支持を得ているという状況が出てきています。

2013年度、諸般の事情で中高部長を兼任させていただき、1年かけて神戸女学院中高部の教育目標と教育方針について、先生方と議論を重ね、それを「神戸女学院中学部・高等学部は、こんな学校です」という文章にまとめました。まもなく、パンフレットや中高部のウェブサイトで公表する予定です。

中学受験における実学志向の傾向を考慮しながら、神戸女学院中高部の目指す教育について、「神戸

女学院中学部・高等学部は、こんな学校です」の「卒業後の進路」の項目では、次のように発信しています。

「神戸女学院では進学実績を公表していません。卒業生の進路状況はもちろん把握していますが、数値化して公表することはしていません。それは大学進学を教育の主たる目的としていないからです。大学受験の結果は、生徒一人一人が自己実現のために努力した成果と考えており、その結果の公表は、必ずしも学校のめざす理想を具体的に示すものではないと考えています。神戸女学院の授業で培われる学力は、『大学受験にも耐え得る学力』であって、『大学受験のためだけの学力』ではないのです。大学への進学は神戸女学院中高部の教育の結果であって、決して目的ではないという姿勢で日々の教育に臨んでいます。

しかしそれは自由放任の教育ではありません。中学部のあいだは、基本的な学習習慣を身に付けさせ、高等学部では、発展的・主体的な学習態度を身に付けさせます。また、一人一人の生徒に合わせて、その生徒の学習を支えていきます。神戸女学院大学への進学も選択肢のひとつとして在学中から情報を提供しています。希望者には大学の授業を受講する機会も与えています。」

実際に有名国立大学や医学部への進学実績をあげているのに、なぜ進学実績を公表しないのか。もし公表すれば、受験生は確実に増えるという指摘を、いろいろな機会にいただいています。

神戸女学院中高部も、いまその真価が問われています。受験産業や受験生とその保護者の皆さんの多くが求めておられる大学受験の実績のみを求める教育が、本当に中等教育において目指すべき教育なのかどうか。その問いを考えていただくために、神戸女学院中高部の教育の目標と実態を知っていただく努力を続けていかなければなりません。

さまざまな個性と能力を持った優秀な友達と、お互いに刺激を与え合いながら学びを続けられること。これが神戸女学院中高部が多くの人びとから支持をいただいている大きな理由です。この環境を維持していくことが、何よりも重要です。このことは神戸女学院大学がこれから実現していかなければならない姿でもあるのではないのでしょうか。いま、神戸女学院教育の真価が厳しく問われています。

クリスマス報告

〈中高部 クリスマス燭火賛美礼拝〉

12月18日(水)、中高部ではクリスマス燭火賛美礼拝を守りました。

アドベントに入ってから1本ずつ点されたきた講堂のアドベントクランツに4本目のローソクの火が点されハンドベルの演奏で礼拝は始まりました。リコーダーの演奏やJ・Sコーラス部による讃美と聖書朗読に続いて、東神戸教会の川上盾牧師から「客間の外で」という題でメッセージを語っていただきました。ジョン・レノンの「ハッピークリスマス」の弾き語りから始まった説教の中で先生は「私たちの関心の外に置かれた人々のところにこそキリストはお生まれになるのではないか」と問われました。先生は東神戸教会に着任された17年前に、ルミナリエや神戸の繁華街のクリスマスの様子を楽しんだ翌日に阪神・淡路大震災後の仮設住宅で暮らしておられる方々を訪ねられたそうです。その時に被災者の一人が話されたという「あなたが訪ねてくれて5日ぶりに人と話した」という言葉は、私たちの社会が抱える深い孤独を思わせると同時に、救い主が客間の外でお生まれになったということの希望を思わせるものでした。私たちはつい賑やかさや華やかさの中に身を置いて楽しみや安心を得ようとしてしましますが、クリスマスにこそ「救い主はどこにお生まれになったのか」ということを問いながら、社会を見渡すことをしてゆきたいと思われました。その場所に心を向けることで、これまでは知らなかったクリスマスの喜びを知らされるのだらうと思います。先生は最後に「夢は一人で見ていたら夢でしかないが皆で同じ夢を見ればそれは現実になる」というジョン・レノンのメッセージを紹介され、「ハッピークリスマス」を日本語訳で歌ってくださいました。先生の力強い歌声と歌詞が心に響きました。

その後、講堂には信仰・希望・愛を象徴する火が点され、各自が持ち寄った献金を捧げ、祈りを合わせました。この礼拝を通してもう一度クリスマスの意味を考え、一人一人に期待されている役割について思いを寄せることができたと感じています。

美しい音楽のご奉仕をくださった音楽選択受講者の皆さん、J・Sコーラス部の皆さん、そして説教をしてくださった川上先生に心から感謝申し上げます。

(中高部チャプレン)

〈大 学〉

世界中の多くの人々が待ち望むクリスマスの時期をむかえました。例年と同じくクリスマス前の一週間は各学科によるチャペルアワーをまもり、演奏や合唱、心温まるクリスマスのエピソードをうかがうなど、趣向を凝らしたチャペルアワーをまもりました。

クリスマス礼拝当日となる金曜日は、授業の時間割を変更し、正午から大学クリスマス礼拝を皆でまもりました。夜に行われる学院公開クリスマス礼拝と同じく、音楽学部による演奏・合唱奉仕の中での讃美礼拝は、主イエスの誕生を祝い、敬虔な気持ちを思い起こします。今年は日本基督教団浪花教会牧師の村山盛芳先生に「泊まる場所がなかった」と題してメッセージをいただきました。

終了後には、出口においてささやかなチョコレートプレゼントが、院長先生や学長先生、宗教活動委員の先生方、学生ボランティアによって、会衆に配られ、皆で共にいただき、主イエスの聖誕をお祝いいたしました。

また、学生ボランティアには今年もクリスマス礼拝での舞台照明、受付のスタッフとして奉仕をしていただきました。

昨年に引き続き、会場のほのかな灯りの中、暗闇の中に灯る壇上の蠟燭の光に、キリストの生涯と福音を感じる大切なひと時となりました。

(チャプレン室)



〈神戸女学院 公開クリスマス礼拝〉

学院全体でまもられる公開クリスマス礼拝は、今年で41年目をむかえました。

今年も、例年のようにオルガニストの片桐先生による心引き締まる前奏から始まり、高等学部生徒によるハンドベル演奏、招詞、一同による讃美。会場

の電気が消され、壇上の蝋燭の灯りだけがゆらめく
中、音楽学部による演奏が会場に鳴り響きます。聖
書が読まれ、中高部コーラス部による合唱。中高部
チャプレンから「キリストに照らされて生きる」と
題してメッセージをいただきました。

再び音楽学部の演奏。毎年お世話になっています
音楽学部の中村先生、今年から着任されました音楽
学部の Xavier LUCK 先生に指揮をしていただき、
オーケストラの演奏に、しばし日常を離れ、音楽に
心をゆだねるひと時が与えられました。そして一同
で高らかにクリスマスの讃美歌を歌い上げ、最後に
祝福をもってクリスマス礼拝は終わりました。

毎年、少しずつ舞台に変化を加えています。今年
は燭台の配置を変えました。2階からのフルートと
トロンボーンの奏楽にも、礼拝にふさわしいもの
と、出席者から好い印象のお言葉をいただきました。

学院全体が大切にまもっているこのクリスマス礼
拝は、神戸女学院がキリスト教主義学校であることを
強く伝えられる大きな機会であるとともに、学院
として共にひとつの祈りのときを持つことができる
意義ある場です。来場者数も600人と、会場が満員
になります。皆様がこのひと時を変わりなくおおほ
えくださることを41年目の節目として改めて心に刻
み、心より感謝申し上げます。

次年度以降も主の恵みに共に与かるひと時を、神
戸女学院に連なる者として、一緒に過ごしていただ
けるよう祈るものです。

司式：中野 敬一 奨励：中高部チャプレン
指揮・編曲：中村 健 指揮：Xavier LUCK
合唱・管弦楽：神戸女学院大学音楽学部
ハンドベル・中高部コーラス部
奏楽：片桐 聖子

(チャプレン室)

〈プレゼント・献金報告〉

★施設へのプレゼント

今年も大阪水上隣保館（大阪府三島郡）と神戸真
生塾（神戸市中央区）へプレゼントをお届けするこ
とができました。神戸真生塾には、J家庭科研究部
による手作りの小物とS料理研究部が焼いた名前の
入ったクッキーを合わせてプレゼントしております。

昨年に引き続き、東日本大震災をおぼえて、福島
にある社会福祉法人 牧人会（福島県西白河郡）の白
河めぐみ学園と白河こひつじ学園です。

個人情報保護の問題もあり、続けていくことがな
かなか困難な行事となってきましたが、誰かがあな
たの事を思い、支えたいと思いを寄せているその気
持ちだけでも施設の皆様にお伝えできるよう、これ
からも行っていききたいと思います。今年は神戸真生
塾には中高部自治会の方々、福島の2施設には中野
チャプレン、大阪水上隣保館には松田チャプレン
が、サンタクロースの代表としてプレゼントを選び
ました。合わせて報告させていただきます。

個人情報保護のため、
一部削除しています。

みなさま、ありがとうございました。

(チャプレン室)

KCCだより

[Kobe College Corporation (KCC) was established in 1920 in Chicago, Illinois, as a non-profit organization by a group of Christian philanthropists. Its original purpose was to provide financial support for the relocation of the Kobe College campus from Kobe to Okadayama. Ever since, KCC has been a strong supporter of the school, both materially and spiritually, creating opportunities for cross-cultural educational experiences for students and teachers. In 2004, the organization added "Japan Education Exchange" to its original name as its activities expanded beyond support for the school. Kobe College has benefited greatly from the generous support of KCC-JEE for many years.]

"Celebration of Oliver Hadley Statler, Friend of KC and KCC-JEE"

KCC-JEE Board of Directors

Jeanne Sokolowski



Kobe College Corporation-Japan Education Exchange (KCC-JEE) held its Annual Meeting in Chicago on September 21st, 2013 at the Union League Club. This year's program focused on Japan scholar Oliver Hadley Statler (1915-2002) and his

relationship with Kobe College and KCC-JEE.

Oliver Hadley Statler was born in 1915 in Huntley, IL. He attended the University of Chicago, receiving a BA in 1936. Statler then worked in the University's Business department until 1941, when he was drafted into the Army.

As the war ended, Statler requested a transfer to Japan, but was discharged. Undeterred, he took a civil service position with the Occupation Army and worked in Yokohama until 1954, after which he remained to research and write.

Statler quickly became very interested in the new art movement called *sosaku hanga*. He became friends with many of the artists, such as Koshiro Onchi, and frequently functioned as an art broker, selling prints to American art collectors. His first publication was the non-fiction book *Modern Japanese Prints: An Art Reborn* (1956).

Statler donated over a thousand of his Japanese

prints to the Art Institute of Chicago. These prints are not on permanent display, but, through a special arrangement with Associate Curator of Japanese Art, Dr. Janice Katz, KCC-JEE board members and special guests were able to view pieces from the Statler collection on Friday, September 20th.



Statler's fiction career began when he visited the Minaguchi-ya, a traditional inn located on the old Tokaido road that had been in the hands of the same family for 18 generations. Statler became friendly with them and wrote *Japanese Inn* (1961). Statler continued writing fiction, publishing *Black Ship Scrolls* in 1963 and *Shimoda Story* in 1969 before returning to the U.S.

In the early 1970s, Statler was active with the Japan America Society of Chicago, through which he met KCC board members David and Margaret Larson. Statler served on the KCC board from 1974-1977, just after returning from a Guggenheim fellowship year in Japan (1973) to study the Shikoku pilgrimage. In 1977, Statler moved to Hawaii to teach in the Department of Asian Studies at the University of Hawaii in Manoa.

But Statler hoped to return to Japan to continue his research on the Japanese pilgrimage. When Kobe College president Michio Okamoto wrote to Dave Larson, then president of KCC, to inquire about hosting a lecturer, Statler's name came up. He was able to teach at Kobe College in the Intercultural Studies and English departments in 1980-1981, supported by the Megumi Fund.

In a report to the KCC board, Statler noted that he had a very warm welcome at KC. He advocated increasing the support for English language instruction for all students, recommended a language laboratory, and suggested expanding the library.

During his tenure at KC, Statler appeared on NHK to talk about his research on the Shikoku pilgrimage. With Matsuyama filmmaker Ueda Masakazu, he produced the 30 minute documentary "The Pilgrimage to the Eighty-Eight Sacred Places of Shikoku" (Ueda Film) in 1983, the same year as the publication of his book *Japanese Pilgrimage*. The

film was screened at the KCC-JEE Annual Meeting this year.

During the 80s, Statler began work on another book, a novel about Dazaifu Tenmangu Shrine, but did not complete it. He died on February 14, 2002. His ashes were scattered off the coast of Waikiki.

[コーベ・カレッジ・コーポレーション (KCC) は、1920年に神戸女学院岡田山キャンパス移転に際して資金援助のため創立された、アメリカ合衆国イリノイ州を本拠地とする非営利団体 (NPO) です。以来日米両国の学生生徒ならびに教員のために、さまざまな文化交流の機会を創り出すなど、有形無形の力強い支援をおこなっており、神戸女学院は大きな恩恵を受けてきました。2004年、KCC は活動の範囲を神戸女学院支援に加えて、さらにひろげようとして、名前の後にジャパン・エデュケーション・エクスチェンジを付け加えて KCC-JEE となりました。今回のお便りは、理事のおひとりで、元中高部ミッシヨナリー英語教員の Sokolowski 先生が執筆くださいました。]

「われらの友

ーオリバー・ハドレー・スタットラー」

KCC-JEE 理事

ジーン・ソコワスキー

今年度の KCC-JEE 年次総会は、2013年9月21日にユニオンリーグクラブにおいて開催されました。今年度のプログラムでは、日本研究者のオリバー・ハドレー・スタットラー (1915-2002) と神戸女学院および KCC-JEE との関係がとりあげられました。

オリバー・ハドレー・スタットラーは、1915年、イリノイ州ハントレーに生まれ、1936年には、シカゴ大学で文学士号を取得しました。その後シカゴ大学経営学部で奉職、1941年に徴兵され陸軍に入隊しました。

戦後、スタットラーは、日本への配属を願いましたが、除隊になってしまいました。しかし、彼は、めげずに、進駐軍の民間協力者の職を得て横浜で1954年まで働き、その後も日本に残って、研究と著作を続けたのです。

スタットラーは、まもなく「創作版画」という新しい芸術運動に深い関心を持ち、恩地孝四郎など、多くの版画家と友人になり、しばしば、彼らの作品をアメリカ人のコレクターに売る仲買人の役割を果たすようになりました。彼の最初の著作は、ノンフィクションで「*Modern Japanese Prints: An Art Reborn* (1956) (邦題：よみがえった芸術—日本の現代版画)」でした。

彼は、自身の千を超える日本の版画コレクションを、シカゴ美術館に寄贈しました。それらの作品は常設展示はされてはいませんが、今回日本美術担当学芸員のジャニス・キャッツ博士の特別なはからいにより、KCC-JEE 理事とゲスト達はスタットラーコレクションの一部を9月20日の金曜日に鑑賞することができました。

スタットラーが小説を書き始めたのは、旧東海道沿いの水口屋という、18代続いた古い旅籠を訪れたことでした。彼はその主人と知り合いになり、「*Japanese Inn* (1961) (邦題：ニッポン歴史の宿：東海道の旅人ものがたり)」という作品を書きました。その後も小説を書き続け、1963年には「*Black Ship Scrolls*」、1969年には「*Shimoda Story* (邦題：下田物語)」を上梓し、米国に帰国しました。

1970年代初め、スタットラーは、シカゴの日米協会に積極的に関わっていましたが、その活動を通じて、当時の KCC 理事であった、デイビッド・ラーソン夫妻と出会いました。スタットラーは、1973年にグッゲンハイム・フェローシップにより四国巡礼を研究するため、日本を再訪し1年を過ごした後帰国して、1974から1977年まで KCC 理事を務めました。1977年には、ハワイに移り、マノアのハワイ大学アジア研究科で教鞭をとりました。

しかし、スタットラーは日本の巡礼について研究を続けるため、日本に戻ることをずっと望んでいたのです。神戸女学院の岡本道雄院長が、当時のデイビッド・ラーソン KCC 会長に、客員教授派遣を依頼したとき、スタットラーの名前が浮上しました。こうして彼は、1980年から1年間、神戸女学院大学英文学科と総合文化学科で教えることができたのです。

KCC 理事会へのスタットラーの報告によると、彼は、神戸女学院で大変温かい歓迎を受けたそうです。彼は全学生に対する英語教育を推進することや、LL 教室の設置、図書館の拡充を強く勧めました。

神戸女学院大学在学中、スタットラーは NHK テレビに出演して、四国巡礼研究について語ったこともあります。1983年には、松山市の映画製作者 Ueda Masakazu 氏とともに、30分のドキュメンタリー「*The Pilgrimage to the Eighty-Eight Sacred Places of Shikoku*」(Ueda Film) を作成し、同じ年に、「*Japanese Pilgrimage*」を出版しました。今年の年次総会では、この映画が上映されました。

80年代、スタットラーは、新たな本—大宰府天満宮に関わる小説—を書き始めましたが、未完に終わっています。彼は2002年2月14日に亡くなり、ワイキキの沖合いに散骨されました。

2014年度年間標語

あなたの重荷を主にゆだねよ
主はあなたを支えてくださる。
(詩編55編23節)

退職のことば

スイス・アルプスの麓、パーレンベルクという村に、伝統的・歴史的な家屋を集めた（愛知県の明治村のような）広大な野外博物館があります。ここに展示されている18世紀の農家の窓辺に、慎ましく掲額されたこの詩編の言葉を見かけました。古くから愛されてきた言葉です。

詩編55編を始めから読み進むと、終結部におかれた上記の言葉に、ある種の唐突感を覚えます。というのも、この作品は冒頭からは「わたし」（作者）が友に裏切られた悲しみを、神である「あなた」にせつせつと語りかけていますが、23節の「あなた」は、明らかに作者です。作者以外の誰かが、作者に、「神にゆだねよ」と、新しい指示を発しています。研究者はこの言葉を、「わたし」の眩きを聞いた祭司が告げた励ましと説明します。「神への依存」ということだと、わたしたちが日頃「宗教的」と考えるイメージに近いかもしれません。

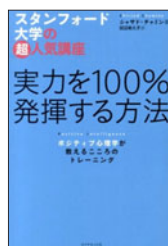
しかし重層的な意味世界をもつ原語（ヘブル語）の言語構造からは、もう少し異なる能動的なニュアンスが伝わってきます。「重荷」と訳された語（ヤーハブ）は「与える」を意味する動詞の派生語で、直訳は「与えられたもの」です。重荷も神から与えられた、その意志の内にあるものとの理解によります。ですので、この語は「（神が与えた）才能」をも意味します。神が支えるゆえに、重荷も才能となる。与えられた知識や能力を、自分のためにではなく、神と隣人のために用いよ、と。このテキストにも「愛神愛隣」のメッセージが響いています。

本学院は本年秋から創立140年目に入ります。神と隣人に仕えるために与えられた賜物を磨く——150年という大きな区切りに向けて、建学の志を見つめ直し、新たに活かす一年といたしたく思います。

（学院チャブレン）

個人情報保護のため、
7ページ目右段から
13ページ目は削除
しています。

新刊紹介



田辺希久子(英文学科教授) 訳
シャザド・チャミン 著

『実力を100%発揮する方法
—スタンフォード大学の超人気講座
ポジティブ心理学が教えるこころのトレーニング』

ダイヤモンド社 2013年8月刊
331頁 1,800円＋税

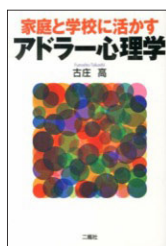
本書は *Positive Intelligence: Why Only 20% of Teams and Individuals Achieve Their True Potential AND HOW YOU CAN ACHIEVE YOURS* (2012) を田辺先生が翻訳されたものである。著者は世界最大のコーチング組織 CTI の前 CEO。数百人以上の CEO と上級管理職にコーチングを行い、現在はスタンフォード大学で「ポジティブ・インテリジェンス」を講義し、管理職を中心としたビジネスマンで常に教室が一杯になる人気授業という。

「個人にしてもチームにしても、もてる力をフルに発揮できるのはほんの20%に過ぎない」と著者は始める。何者がそうさせているのか。それは私たちの心であり、自分も知らない心の中の「妨害者」が失敗をもたらししているのだ。つまり心は「最大の味方であり、最大の敵」である。ならば心が味方として働いているか、敵として働いているか（妨害しているか）を知り、コントロールすれば良い。そこでポジティブ・インテリジェンスの登場。「二種類の心の状態のどちらが優勢かを測る物差し」と説明される。PQ は「ポジティブ・インテリジェンス指数」の略で、PQ75であれば心が75%の割合で味方として働いていることになり、PQ を高めること（心の「賢者」を強めること）で成功と幸福、心の平安を手に入れることができるという。この内なる「賢者」という発想に、キリスト者である私は、自分を肯定し受容してくれる絶対者の声と相通ずるものを感じて興味深かった。

本書では PQ スコアを高めるための実践的なツールが提示されている。「PQ を改善する三つの方法」や「PQ 脳を鍛える」、「仕事やプライベートの応用例」などに加えて、多くの事例もある。職場はもちろん家庭や様々な場において応用可能であり、自分を見直すことやコミュニケーションに関する示唆が与えられ、早速試したくなるテクニックもある。翻訳は読みやすく、わかりやすく、多数の自己啓発書を翻訳してこられた田辺先生の面目躍如たる一冊であると思う。

(総合文化学科准教授 中野 敬一)

新刊紹介



古庄 高(総合文化学科教授) 著

『家庭と学校に活かす
アドラー心理学』

二瓶社 2013年12月刊
205頁 1,500円＋税

〈勇気づける〉教育を

教育については教師のみならず、ほとんどすべての人が何かしら意見を持つ。子どもがいれば言うまでもなく教育は切実な問題になるし、子どもがいなくても「近頃の若者は…」などと思わないことはなさそうだ。教育をいっさい誰からも受けていないという人はこの世にいないからだろう。そして人は自分が受けた教育を基準に今の教育にもの申す。もちろん、自分が受けた教育はよかったと思う人ほど今の教育はなっていないと言いたがる。

古庄先生の『家庭と学校に活かすアドラー心理学』は、教育をめぐる昨今の喧騒の中、静かに動ぜずに立っているような書である。社会の変化に無縁だと言うのではない。それどころか、教える側の権威が容易には認められない状況を見据え、クラス学習や協同学習のような学ぶ側の主体性を重んじる新たな方法を提唱している。しかもその方法は、人間を見極めようとするアドラーの心理学に根差しているのである。

アドラーによれば人間のあらゆる活動には〈優越性の欲求〉と〈共同体感覚〉とがあるという。優越性とは他人との比較によるものを意味せず、共同体は特定のそれを意味しない。一人の人間の「優れたもの、完全なものになりたい」という強い欲求が、「人類の理想社会」という共同体に資するとき、その人の人生は意義深くかつ健康なものとなるのだ。

まさにそのような人を育てるのがあるべき教育である。それは権威主義的でも放任主義的でもない、子どもの自立を促す〈勇気づける〉教育である。このことを古庄先生は、具体例を交えながら、丁寧にかつ凛々しく説かれる。

教育に関わる者には必読の書である。その教育に自己教育が含まれることは言うまでもない。

(総合文化学科教授 高橋 雅人)

その他の新刊一覧

真栄平房昭（総合文化学科教授） 他著
『日本経済の歴史—列島経済史入門』
（名古屋大学出版会）

河西秀哉（総合文化学科専任講師） 他著
『近代日本の歴史都市—古都と城下町』
（思文閣出版）

田辺希久子（英文学科教授） 他訳
『翻訳研究のキーワード』 （研究社）

和氣（直田）節子（英文学科教授） 他著
『イギリス理想主義の展開と河合栄治郎』
（世界思想社）

<CD 紹介>

辻井 淳（音楽学科准教授・ヴァイオリン） 他
ロッシーニ「弦楽のためのソナタ全曲」 （ISODA）

秋季公開講座報告と 春季公開講座のお知らせ

2013年度の秋季公開講座は、「生命（いのち）を見つめなおす」というテーマで、本学教員を含む3名の講師により、11月16日、23日、12月7日に開催いたしました。毎回多数の受講者（第1回144名、第2回164名、第3回133名、合計（延べ）441名）にお越しいただき、秋季の公開講座としては近年にない盛況でした。

第1回（11月16日）は、本学環境・バイオサイエンス学科教授の西田昌司先生に、「生老病死 —細胞生物学からみると—」と題してご講演いただきました。人間の「生老病死」を、生命の誕生・進化・分化の観点から細胞生物学の言葉で語られるという大変ユニークかつ興味深いお話でした。

第2回（11月23日）も本学教員、総合文化学科准教授の中野敬一先生に、「死を考える —豊かな死生観を求めて—」と題してご講演いただきました。

祝日にもかかわらず164名という多数の受講者にお越しいただきました。死に関する種々の現代的な問題や日本人の死生観から説き起こし、死を考えることや死に備えることは生命を見つめ直すことになり、それが価値観や人生観や社会のあり方などの見直しにつながり、更にはそれが、より良い充実した「生」につながるといふ、大変示唆に富んだお話でした。

第3回（12月7日）は、関西学院大学神学部准教授の榎本てる子先生をお招きして、「あなたと私を大切に思い、生きること —HIV カウンセリングの現場から—」と題してご講演いただきました。榎本てる子先生は、カウンセラーとして、病院、保険所、地域 NGO において、HIV に感染した人たちと、長年にわたって関わってこられました。今回のご講演では、そのご経験をふまえたお話で、とても意義深いひと時となりました。

3回とも天候に恵まれ、受講者の皆様の中には、晩秋のキャンパスを楽しまれた方も多かったのではないかと思います。ご講演くださった先生方、ご来場くださった皆様、そして、スタッフの皆様、本当にありがとうございました。

2014年度の春季公開講座は、「情報化社会の光と影」というテーマで、6月の土曜日に3回シリーズで開催する予定です。講師は、いずれも本学の教員で、環境・バイオサイエンス学科教授の出口 弘先生、心理・行動科学科教授の小林哲郎先生、総合文化学科教授の高橋雅人先生を予定しております。各回のご講演の表題はまだ確定していませんが、近年、急速に普及したインターネットに代表される情報化社会の発展が、現代の私たちの生活にどのような影響を与え、どのような問題を生じてきているか、また、私たちはそれにどう対応していけばよいかを考えるシリーズにしたいと思っております。具体的には、インターネットのセキュリティやネットいじめ、情報倫理など、さまざまなトピックをお話しいただく予定です（内容は変更されることもあります）。奮ってご参加くださいますようお願い申し上げます。

（生涯教育委員会委員長）

史料室の窓(33)

キャンパス探訪(4)

リベラルアーツとKobe College

「神戸女学院」改称120年を覚えて

神戸女学院史料室

谷門に一本の石柱があることをご存知でしょうか。防犯用の鉄の冠を頭に載せられ、ひっそりと佇んでいるその柱には、ある文字が刻まれています。「神戸女学院」と。

2014年、神戸女学院は創立139年を迎えます。そして今年には神戸女学院が現在の名称 Kobe College (神戸女学院) を名乗って120年の記念の年にも当たります。

昨年2013年は岡田山キャンパス移転80周年のお祝いで沸いた神戸女学院ですが、このヴォーリズ建築の校舎群を語るうえで、忘れてはならない大きなことが一つあります。それが神戸女学院 Kobe College という学校名です。この名前に込められた思いがここ、岡田山キャンパスに結実しているといっても過言ではありませんから、校名改称について少し説明させていただこうと思います。

皆さんご存知の通り、神戸女学院は1875年、神戸で女子のための寄宿学校として産声を上げました。当時、正式な校名はなく、単に「女学校」と呼ばれていました(Kobe Home という呼び方をする方もありますが、これは宣教師間の通称で、公けに使われた名称ではありません)。スタートした学校は小学校程度のカリキュラムを持っていました。創立者の先生方はクリスチャン養成を目指していましたが、それで充分だったのです。しかし、学制が整い始め、周辺に学校ができ、生徒たちももっと高度なことを学びたいと考えるようになったころ、学校は中学校程度のカリキュラムを持つようになりました。この時の校長、クラークソン先生(Miss Virginia Alzade Clarkson)は、アメリカで高等教育を受けた有能な教師で、学校を教育機関として確立させました。これ以降、「女学校」は「英和女学校」という正式な校名を定め、高等教育を目指して進み始めます。

3代目の校長は就任当初から学校の目標を高等教育であると明言しています。しかも単なる高等教育ではなく、カレッジ教育であると。カレッジ教育とは当時アメリカで行なわれていた女子のための高等教育、リベラルアーツ教育のことです。文系だけでなく理系をもバランスよく学ぶ男子に引けを取らない知的水準の学問とキリスト教に根ざした心の教育を両立させ、寄宿制をも取り入れた全人教育、これが理想のカレッジ教育でした。この教育の実現のため、カリキュラムを改訂して、1885年に大学教育の



谷門の石柱

萌芽となる1年制の高等科を作りました。そして1891年に現在の大学教育の元になる3年制のカレッジ課程が誕生します。神戸女学院は123年にもわたって高等教育を続けている稀有な学校の一つなのです。この教育のために音楽教育と理化学教育の専用校舎まで建てました。そしてその献堂式と時を同じくして校名を改称したのです。Kobe College (神戸女学院) と。校名の College には(当時の)女子高等教育機関であるという意味が含まれています。これが1894年のことでした。

その後、校地が手狭になり、学校は移転を考えます。その時、院長であったデフォレスト先生(Miss Charlotte Burgis DeForest)は、リベラルアーツ教育を行なう女子大学を構想したといえます。そしてヴォーリズ氏(Mr. William Merrell Vories)にキャンパス設計を依頼し、Kobe College の名と実にふさわしい校舎群ができあがったのです。1934年、キャンパスのお披露目が行なわれました。奇しくも校名改称から40年の年に。

谷門の石柱はかつて山本通キャンパスの正門の門柱でした。これは神戸女学院のリベラルアーツ教育の記念碑ともいえるべきものです。「神戸女学院」と刻まれた石柱は、今も静かに学院の歩みを見守り続けています。

人 事

個人情報保護のため、一部削除しています。

慶 弔

栄 誉

＜オフィスの宝物＞

オフィスの宝物

大学事務長室はデフォレスト記念館事務室の西端にあり、家庭会大学部会の運営やその他大学の雑務を担当しています。オフィスの宝物は実は大学事務長であると思っていますが、今回はオフィスが永久保管する『明治41年4月新調学籍簿』（写真）についてご紹介します。

現在の本学は第二次世界大戦後、昭和23（1948）年3月に、いち早く新制大学として設置が認可された大学ですが、それより以前にも、学院には旧制の「大学部」がありました。大正8（1919）年2月に設置が認可されたものです。その旧制の「大学部」の前身である専門部、高等科の学生も含め、女学校創設以来の在籍学生名簿、成績簿であるようです。

2010年秋に大学図書館で開催した「小倉末子展」に貸出し展示いたしましたので、目にされた方も多いことと思いますが、今にも崩れそうな和綴じの原簿を開きますと、学生の氏名がアルファベットと漢字の両表記で、薄い和紙に、時には見事なイタリック体のペン字で、時にはそれは、それは美しい毛筆の楷書体で綴られた記録が目飛び込んできます。一文字も訂正することなく学生の一人一人について綴られた記録を目にしますと、奉職された先輩方の優秀さと丁寧な仕事ぶりに感動を覚えます。そしてそこにはキリスト教の精神を学ぶとともに、知的好奇心が旺盛で、自主性、多様性に富んだ女性として成長すべく、学問の探究や技芸の練達に励んだ少女たちの歩みが綴られているのです。この記録こそ、長い伝統と歴史を誇り、時代を超えて社会の発展のために寄与する女性の育成の証であると思うのです。

（大学事務長室）

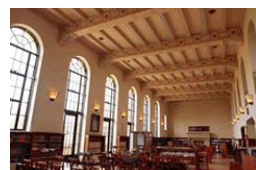


明治41年4月新調学籍簿

オフィス「が」宝物

これまでの『オフィスの宝物』では、各部署のご自慢がさまざまな形で紹介されてきました。図書館にもそうした宝物ももちろんありますが、全くタイプの違う5部門からなる図書館という部署そのものが、宝物の集まりと表現できると思います。

まず、図書館本館は岡田山キャンパス80年の歴史を刻むヴォーリズ建築の建物に貴重資料などを保管、美しい閲覧室ではiPadを利用して静穏な環境を保ったまま最新の資料収集が可能、という本学ならではの場所です。



今年、建築30周年を迎える図書館新館は、ジュリア・ダッドレー記念館書庫とあわせて図書館資料の大半をおさめ、教職員・学生ほか多数の利用

に供しています。昨年4月にはラーニング・commonsが開設され、ますますにぎわっています。音楽学部図書室には、図書・雑誌だけでなく楽譜、CDや映像資料など、音楽学部の教職員・学生が利用するさまざまな種類の資料を所蔵、活用されています。



さらに視聴覚センターでは、語学学習等に役立つAV資料の保管・閲覧と、各教室の視聴覚設備の管理の2つの業務を扱っており、機械モノに

強いメンバーに支えられています。

また史料室では、1875年創立以来の神戸女学院の歴史に関わる各種の資料を収集・整理・保管して、学内外の利用者に提供しています。

このような5つの宝物が集まる「図書館」、それぞれを生かして、神戸女学院の大きな宝物をめざしたいと願っています。

（図書館課長）

大学報告

自己PR全員面談

3年生の就職希望者を対象に、昨年秋の2ヶ月間、「自己PR全員面談」を実施した。

キャリアセンターでの通常の面談は相談内容を問わないが、今回は、選考時に必要となる自己PRを学生個々がまず書いてみることに、そして、カウンセラーのアドバイスを受けながら早い時期に形にすること、これを第一の目的とした。

面談は学科別に予約を受け、最終的に就職登録カード提出者の82%、436名がキャリアセンターに足を運んだ。初めて面談を受けた学生も少なくなかったが、中には二度三度予約し、自己PRをしつかり完成させたケースも複数あった。

就職活動の時期が後ろ倒しになる中で、企業の選考自体は早期化している。景気が回復傾向で、大学生を取り巻く就職環境も改善されつつあると報道されるせいか、学生たちはややのんびりしている傾向にある。企業の採用意欲が高まっても選考基準が下がることはない、大学生の就職が厳しい状況であることに変わりはない。今回面談を受けたことで、自身と向き合い、準備をより早く進める必要があることに気付いた学生も多かったのではないかなと思う。

この面談の結果を現3年生の個別支援に活かすことは勿論、次年度も、学生たちにとってより有効な形で全員面談を企画したいと考えている。

(キャリアセンター課長)



カウンセラーと1対1、20分の面談です

学生寮音楽学部生有志によるチャリティーコンサート

寮生の音楽学部生有志によるチャリティーコンサートが11月29日にめじらウジで開催されました。2011年の東日本大震災復興の支援の一環として産声をあげたこのコンサートも今回で三回目となりました。

昨年まで中心となって準備をしていた4回生に代わり、今年度はその後輩となる学生たちが支援を途切れさせないために活動を引き継ぎ、コンサートに必要な全ての物事を手配、作成、準備をし、日々の練習に加え、更に演目の練習も重ねてまいりました。

クラシックだけでなく映画音楽など馴染みのある曲を交えて、ピアノ、フルート、オーボエ、マリンバ、ハーブに声楽、そして舞踊で表現した楽しいコンサートとなりました。このチャリティーコンサートを立ち上げ、今回で最後の出演となる4回生は、復興への祈りを込めたすばらしい演奏を聴かせてくれました。

参加者は約50名、収益金は昨年同様、福島県の社会福祉法人牧人会の知的障害児入所施設「白河めぐみ学園」と「白河ひつじ学園」にチャブレン室を通じて全額おささげいたしました。

年末の忙しい時期にも関わらずご参加くださった教職員、学生の皆様、そしてこの様に学生たちに活躍の場を与えてくださりご協力くださった大学関係部署の皆様に、この場をお借りして厚くお礼申し上げます。今後も学生たちが自主的に計画して開催し、支援を継続することができるよう願っております。

(学生寮 舎監)



舞踊専攻第5回卒業公演

去る12月5日、6日、7日の3日間にわたり、音楽学部舞踊専攻の第5回卒業公演がエミリー・ブラウン記念館にて行われました。3日間を通して約500名の来場があり、毎公演ほぼ満員の来場者の中で特別出演の3年生1名を含む9名が5作品を踊りました。

1作品目は私、島崎振付による“Journey”で、この作品は過去に振り付けられたものを今回の公演のために再度アレンジしたものです。

2作品目は、4年生田中振付による“Coincidence”を田中本人と3年生の三崎が踊りました。この作品は、教員によって選ばれた優秀作品です。

そして3作品目は鞍掛先生振付による“He Who Me”を4年生の中の3名が踊り、4作品目のMcKelvie先生振付による“postcards from summertime”を残りの5名が踊りました。最後の作品は私が今年度の4年生のために創り、公演のタイトルにもさせていただきました“From Dusk to Dawn”で幕を閉じました。

日々のレッスンに加え、公演のための長い時間のリハーサルを長期にわたってこなしていくためには、個々の学生の強い肉体と精神が求められます。ついこの前、頼りない顔をして1年生として入学してきた彼女たちが心身共に成長し、舞踊を通して自己を表現することに喜びを感じている姿は、私たち教員をはじめ、御来場いただきました観客の皆様の心の中に言葉では言い表せない、しかし人間としてとても大切な何かを、届けることができたのではと思います。

(音楽学科舞踊専攻教授 島崎 徹)



From Dusk to Dawn

かいま見る通訳の世界

本学における通訳翻訳教育10周年を記念し、2014年1月13日(月・祝)13時30分よりメアリー・アンナ・ホルブルック記念館301号室にて「かいま見る通訳の世界」と題したイベントを開催しました。

ゲストとして大学院通訳・翻訳コースの海外提携校から通訳の先生方をお招きしました。前半は米国のモントレー国際大学院大学(MIIS)客員教授・大東文化大学名誉教授の近藤正臣先生が、「多言語国際会議の実際と通訳の原理」と題して講演され、ILO等での経験談を交えて通訳現場の実際や通訳理論について解説されました。

後半は本学通訳・翻訳コースの卒業生、在学生、入学予定の学部生からなる受講生を対象に、「逐次通訳 公開マスタークラス」を開催。本学通訳教員(中村昌弘、奥村キャサリン)のスピーチを受講生が逐次通訳、そのパフォーマンスを近藤先生のほか、豪州のクイーンズランド大学日英通訳翻訳修士課程(MAJIT)主任のYuki Sayeg先生、同じくMAJITで教鞭をとられ現在は国際会議通訳者として活躍中の桑畑三奈子先生(KCH 卒)がコメントされました。

当日は通訳や英語学習に興味を持つ熱心な聴衆87名が会場を埋め、活発な質疑応答もありました。飯学長および中村准教授から通訳・翻訳コースの歴史を振り返るスピーチがあり、発足時の教員や卒業生の参加も得て、10年間の発展を振り返り未来への意欲を新たにすイベントとなりました。

(文学研究科教授 田辺 希久子)

公開マスター
クラス



会場全景

Assumption Collegeと交換留学協定を締結！

2014年1月、本学はフィリピン・マカティ市にあるアサンプションカレッジ（Assumption College）と交換留学協定を締結いたしました。

本学とは以前から活発な交流を行っており、毎年夏にはアサンプションカレッジの学生が本学を訪れる2週間の短期プログラムが用意され、本学学生が日本文化の魅力を紹介するなど、実践的な学びの場を持つ機会にもなっていました。

今回、正式に交換留学協定を締結したことにより、2014年度以降、双方から2名の交換留学生を送り合うことや、以前から実施されていた短期プログラムを今後も継続していくこと、さらに学生だけでなく教員の交流も深めていくことが確認されました。

<アサンプションカレッジ概要>

フィリピン マカティ市にあるアサンプションカレッジは1892年に創立されたカトリック系女子大学です。学生数は約2千人（2014年1月時点）で教育、心理、コミュニケーション、マネージメント、舞踊、シアター芸術等の学科を擁しています。

フィリピンの高等教育機関の評価でトップ10に数えられ、過去2名のフィリピン大統領を輩出し（アキノ氏・アロヨ氏）、実業家、政治家、フィリピン社会における著名な人物の子女が通う学校としても知られています。

（国際交流センター）



Sr. Anna (President) により交換留学協定書にサインをいただきました。

第38回神戸女学院大学英語英文学会（KCSSES）大会報告

2010年度の第35回大会より名称を神戸女学院大学英語英文学会（KCSSES）と改称して4年目となる本年度も、KCSSESは例年通り11月の最終金曜日、29日に午後2時からL-28教室で開催された。今回はグローバル・スタディーズコースが学会準備を担当した。

特別講演は、元駐カンボジア大使、元駐ベルギー大使の内藤昌平氏をお招きし、「日本外交の決定力—1997年夏 カンボディア内紛の後始末—」という標題にてご講演いただいた。特にカンボジア時代の外交官としてのご経験に基づき、外交という仕事の意味・機能について内容の濃いお話をいただいた。質問も大変活発にあり、非常に興味深いご講演であった。

研究発表では、本学大学院文学研究科通訳・翻訳コース修了生で、国立大学法人総合研究大学院大学文化科学研究科国際日本研究専攻研究生の徳嶺絢子氏より「翻訳プロジェクトに関する一考察—芸術学論文を翻訳するにあたって」、そして本学英文学科卒業生で、本学大学院文学研究科英文学専攻博士後期課程在学の高氏より「日本語・韓国語代名詞における心的距離研究」についてご発表いただいた。

来年度、2014年度は言語コミュニケーションコースが学会準備を担当し第39回大会を開催予定である。ご参加の皆様及び日頃 KCSSES をご支援いただいている会員の皆様に厚く御礼申し上げます。

（英文学科長）



ご講演中の内藤昌平氏

音楽学部定期演奏会報告

2013年度の音楽学部定期演奏会は、昨年12月3日(火)午後6時30分より兵庫県立芸術文化センターKOBELCO大ホールで開催されました。

音楽学部定期演奏会は、学部の顔ともなるべき重要な行事で、ほぼ全員の学生が参加し、オーケストラには非常勤の先生や、多くのオーケストラ要員、担当教員以外の教員も役割分担をして当日に臨みます。後期の合唱やオーケストラの授業以外にも臨時練習を重ねて当日のステージを迎えます。今回の定期演奏会では、1、2年生の合唱による荘厳なオルバーンの女声合唱とピアノのためのミサ曲第9番(山本哲也非常勤講師指揮、ピアノ伴奏:金沢彩子伴奏要員)に始まり、3、4年生の合唱では43年の長きにわたって本学でご指導くださり本年度末にご退職される澤内 崇先生作曲の立原道造の詩による女声三部合唱組曲《黄昏に》(中村 健教授指揮、ピアノ伴奏:小原 友伴奏要員)が演奏されました。まさに詩と音楽を一体にすることができる澤内先生の手による女声合唱の繊細かつ力強い歌声は、「別れ」というテーマに基づき、日本人の感性に直接訴えかける音楽であり、聴衆に深い感銘を与えました。休憩後には、オーディションで選ばれた大学院音楽研究科2年生の廣瀬さんをソリストとして、北欧のロマンチックで雄大な風土を余すところなく表現したグリーグのピアノ協奏曲(辻井 淳准教授指揮)。舞台空間におけるオーケストラの楽器配置を巧みに利用してオーケストラならではの効果を発揮した、ベル

リオーズの「幻想交響曲」第2楽章「舞踏会」。メゾソプラノの山田愛子非常勤講師をソリストに、フラメンコなどの様々なリズムが華々しく入り乱れるファリャの舞踊音楽「三角帽子」より(中村 健教授指揮)、など様々なジャンルの曲目が演奏され温かい拍手をいただきました。

ステージ上の演奏は、どれも素晴らしいものでありましたが、大きな舞台に合唱を整列入退場させたり、オーケストラの大型楽器搬入やイス、譜面台を並べるなどのオーケストラのセッティングは、事前準備を含めて多くの教職員、学生の手によるものです。中でも合唱とオーケストラの配置を休憩時間中に転換させるために、リハーサル時から、教職員、学生スタッフが一丸となって演奏会の成功に向けて舞台上を走り回り、無事演奏会が終了したときの達成感を学科全員で味わえたことは、何よりの喜びであったと思います。

当日は、メサイアや第九の年は別として、例年より多くの800名を超える方々のご来聴をいただきました。また、当日ロビーでは、学生によって台風で被災したフィリピンのアサンプション大学への募金活動も行われ、集まった募金は、学院から現地に送られました。ご来聴いただいた皆様、また、この演奏会の為にご尽力いただいた多くの皆様に、心からお礼申し上げます。

(音楽学科長)



2013年度 卒業論文題名

文学部 英文学科

文学部 総合文化学科

2013年度 音楽学部卒業演奏会演奏曲目

2013年度 卒業論文題名

人間科学部 心理・行動科学科

人間科学部 環境・バイオサイエンス学科

2013年度 博士論文題名

文学研究科

2013年度 修士論文題名

文学研究科

2013年度 音楽研究科修了公開試験曲目

2013年度 博士前期課程・修士論文題名

人間科学研究科

個人情報保護のため、
23ページ目から43ページ目は削除しています。

<先輩からのメッセージ>

在学生のみなさんへ

明石 真理子

(人間科学部人間科学科卒業)

私は神戸女学院卒業後、2006年4月から株式会社NTTドコモに勤務しています。私は、入社後3年間多摩支店で法人営業、2009年から、本社の金融ビジネス推進部でおサイフケータイの新サービスの企画・導入を経て、現在は埼玉支店にてドコモショップの経営コンサルティングを行っています。

NTTドコモでは、携帯電話と他事業との融合ビジネスを新規事業として掲げていますが、新商品の開発は、未知の世界との遭遇です。おサイフケータイとは、クレジットカードを発行し、カードでも携帯電話でも支払ができるのですが、サービス検討時には、携帯電話事業に加え、貸金業務取扱主任者やファイナンシャルプランナーなど、金融ビジネスの勉強にはじまり、商品企画、広告やCMのプランニングまで毎日深夜まで先輩たちと和気藹々と話し合い、まるで毎日が文化祭の準備みたいでした。

自分の手がけた商品が報道発表を終え、大スクリーンでCMが流れた時、涙が止まらず、社会人になっても本気で泣けることに取り組めるって本当に素敵なことだと思いました。

学生時代、特に優秀でもなく、天然キャラの女子校10年間出身で、総合職なんて無理と思っていた私が、8年後に学報に寄稿させていただくことになり、とても不思議な気持ちです。当時の私のように自分に自信がなくて、でも、新しい世界に憧れがある学生さんがいらっしゃったら…。

『人生はネタと奇跡の連続だから。未来に向けて一歩前へ!』



縁(えにし)

田代 菜美

(人間科学部人間科学科卒業)



私は2006年にシャープ(株)に入社し、法人向け営業職に就きました。部では初の女性営業職で化粧品・医薬品メーカーを担当し、2年目に東京転勤も経験しました。営業ではお客様の立場で商品を提供することの大切さ、自分が会

社の顔ということの責任の重さと誇り、社会人としての基礎を学びました。3年目に海外事業本部に異動となり、国内外での状況把握ができる場所で仕事をし、会社を多面的に見る機会を与えてもらいました。現在は秘書室で役員秘書業務をしています。緊張感がある職場で毎日勉強ですが、貴重な経験をさせてもらっています。その他に会社の課外業務として、小学生に地球環境の授業を行う講師の活動もしています。仕事で最も大切なことは人間関係を重んじることだと私は思います。昨年結婚をしましたが、主人が米国に駐在しており、数ヶ月別居婚になりました。お互いに仕事をしながら幸せな結婚生活が続けられるのは、周りの方々の理解と協力によるものだと心から感謝する毎日です。女性は結婚、出産、育児とライフステージの変化と仕事の両立が必要です。人生の充実には人間関係の構築は最も重要なことだと感じます。

皆さんにはこの先、沢山の素敵な経験と出会いが待っていると思います。私が一番大切にしているのは「人との縁」です。仕事も生活も一人でできるなんてことはありません。皆さんが素敵なお縁に恵まれ、更なるご活躍をされることを心からお祈りしております。

2014年度大学入試結果（中間2/20現在）報告と概要

2014年度一般入学試験前期A・B・C・D日程では、延べ2,161名の志願者があり、1,844名が受験しました。志願者の内訳を見ますと、文学部英文学科は572名（昨年比108%）、総合文化学科は785名（同比96%）、音楽学部音楽学科は21名（同比70%）、人間科学部心理・行動科学科は431名（同比93%）、環境・バイオサイエンス学科は352名（同比127%）、全体で41名増（2%増）という結果になりました。

本学では基本的に年内入試での入学者の割合を減少させ、一般入試での入学者比率を上げる努力を続けています。

しかし今年度も昨年同様、長引く不況を反映して学費の安い国公立大学志向、地元志向、資格重視の傾向が続いています。

2015年度入試は数学および理科において新教育課程からの出題となるため、浪人を避ける受験生の出願が増えるかと予測しましたが、残念ながら大学入試

センター試験を利用する入試（以下 DNC 試験）志願者は3年続けて相当数減少となりました。

試験は1月29日、30日、31日、2月12日の4日間で実施し、2月8日にA・B日程494名、2月20日にC日程134名、D日程113名の合格者を発表しました。

DNC 試験（前期日程）では昨年比95%の360名が受験し、成績上位層の獲得を目指し、2月15日に218名の合格者を発表しました。

今年度の一般入試後期日程は、3月4日に文学部、人間科学部で実施します。また今年度よりDNC 試験（後期日程）を新設します。

本学の志願者数は2,500名から2,521名へと昨年並みの数字を確保しましたが、昨年度は大幅に志願者数が減少していますので、未だ回復していません。

次年度以降も受験生増加へと好転するよう積極的に学生募集活動を実施してまいります。

（入学センター・広報室課長）

＜神戸女学院大学の企画による2014年度夏期語学研修参加者募集＞

2014年度の夏期語学研修は、次の5プログラムが実施予定です。詳細は4月作成予定の募集要項をご参照ください。また募集説明会を実施する予定です。日程は、決定次第、国際交流センター掲示板とK-CLIPで告知します。春期（2015年2月～3月）にも語学研修を予定しています。詳細は国際交流センター（デフォレスト記念館1階）まで。TEL：0798-51-8579 Email：kokusai@mail.kobe-c.ac.jp

第5回 西オーストラリア大学（豪州）

時期：2014年8月～9月 募集人数：20人 参加費用：約45～50万円

西オーストラリア州のパースにある自然豊かなキャンパスで、約4週間、総合的に英語を学ぶ。ホームステイの予定。

第2回 ニューカッスル大学（英国）

時期：2014年8月～9月 募集人数：20人 参加費用：約50～55万円

イングランドの北東部にある美しい田園風景と歴史的な町の中心部に位置する大学で、約4週間の英語研修を受講する。他国の学生とともに寮生活をしながら生きた英語を学ぶ。

第6回 カリフォルニア大学アーバイン校（米国）

時期：2014年8月～9月 募集人数：20人 参加費用：約50～55万円

他国の留学生と共に約4週間、基礎および応用英語を学ぶ。英語力によっては、ビジネス英語クラスを受講することも可能。

第3回 ヨーク大学（カナダ）

時期：2014年7月～8月 募集人数：20人 参加費用：約50～55万円

多文化都市トロントにあるカナダで3番目の規模を誇るヨーク大学で、約4週間の英語研修を受講する。現地学生との交流や学外活動も含む。

第9回 フランシュ・コンテ大学（仏国）

時期：2014年8月～9月 募集人数：15人 参加費用：約50～55万円

パリから電車で約2時間半のブザンソンで、フランス語を約2週間集中的に学び、研修前後のパリ研修で、生きたフランス語を吸収する。隔年実施の研修。

<受入れ留学生報告>

すばらしい留学経験

ロックフォード大学交換留学生

私は10ヶ月間神戸女学院大学に留学しました。私は日本にきたとき、全く日本語がわかりませんでした。しかし、北村先生が一生懸命日本語を教えてくださいましたので、私の日本語は段々上手になりました。

日本はアメリカと考え方や文化がとても違います。私は最初、日本の生活や日本人とのコミュニケーションについて、とても不安でした。でも、この大学の留学生バディシステムのおかげで、私は英語が話せる親切的な日本人の学生といい信頼を作れました。留学生バディのおかげで、私は自分の家族や友人に会えなくても、寂しくなかったです。そして、神戸女学院大学の学生はとてもフレンドリーな人達で、私はすぐに友達を作ることができました。

それにもかかわらず、日本で生活することは必ずしも容易ではありませんでした。日本の文化について何も知らなかったので、時々疎外感を感じました。でも、毎日日本語や日本の文化を勉強すること続けると、次第に私の日本語や日本への理解は向上しました。

また、私は大学の学生寮に住んでいながら、日本中を旅行することができました。例えば、京都ではきれいなお寺や神社を見ることができました。広島では、日本人の平和を願う心を強く感じました。また、富士山に登ったときは、日本の「がんばろう！」という精神も感じました。休み中には、北海道や沖縄への旅行を楽しみました。この旅行を通して、私は関西に住んでいる人がとてもフレンドリーなことを知ることができて、よかったです。

このように私はすばらしい留学経験をする事ができたので、アメリカへ帰っても、日本語の勉強を続けたいです！

笑って泣いた留学生活

徳成女子大学交換留学生

蒸し暑かった夏もいつのまにか、体と心をぞくぞくさせる冬になってしまいました。ここ神戸女学院大学で過ごした5ヶ月は夢のように一瞬でしたが、振り返ってみると思ったより多くのことを体験できたと思います。今はこの

生活が当たり前に感じますが、韓国に帰ったら二度と感じられないことになるかもしれません。

私は大学に入学した時から、いつか交換留学生として外国で勉強したいと思っていました。しかし、専攻の日本語の勉強だけでなくサークルの活動やアルバイトもする忙しい生活の中で、留学は次第に遠ざかりました。海外旅行にも行ったことがなかった私だったので、できないと感じたかもしれません。ですが、勇気を出して申請した交換留学が合格になって、今はその大きくじんとした瞬間もほのかに感じるぐらいになりました。

家族と離れて住むことも、外国で住むのも初めてだったので、心配もありましたが、夢に描いた日本を直接感じられるというわくわく感の方がもっと大きかったです。5ヶ月間生活しながら、日本の短所も見えるようになりましたが、それは決して悪いことではないと思います。むしろ私が日本とちゃんと向き合うようになった気がします。また自分自身について客観的に見ることができるきっかけにもなりました。じっくりと私の現在と未来を考えることができたし、色々な人と深く交流しながら、たくさん刺激も受けました。

神戸女学院だったからこそ、このすべてができたと思います。近くで私の面倒を見てくださった国際交流センターの方々、寮の先生方、そして留学生バディたちや中国、アメリカの留学生に感謝の気持ちを伝えたいです。最後に、外国で勉強したいが、準備ができていないと思って先に延ばしたり、諦める人がいたらこう言ってあげたいです。挑戦するなら、今でしょう！

一步進んだ半年

徳成女子大学校交換留学生

以前、家族旅行と一人旅で経験した日本は、私にとって本当に魅力的な国でした。日本への交換留学があると知ったとき、必ず合格して日本に交換留学をしたいと思いました。半年という短い期間の間に、神戸女学院大学で経験した様々な思い出は決して忘れられません。西宮まつりに参加したこと、京都に行って美しい着物を着て紅葉を見たこと、奈良に行って正倉院展を見たこと、友達と一緒にユニバーサル・スタジオ・ジャパンに行ったことなど、全てが私にとって大切な思い出になりました。神戸女学院大学に来たことが、まるで昨日のことのように残っているのです。しかし、もう2013年を超えて2014年になりました。長いと思えば長い半年が、本当に短く感じられるほど、あっという間に過ぎました。韓国に帰ったら神戸女学院大学のきつい坂も、美しい建物と綺麗な自然も、目覚まし時計の役割をしたカラスも、そして楽しかった授業も懐かしくなることでしょう。毎晩の苦しかった点呼も、毎週の不慣れなお夕拝も、がやがやした台所も、韓国に帰ったらなくなると思うと、悲しくなります。

初めての海外生活と一人暮らしは、自分自身が成長するよい機会でした。時々、寂しくなったり、不安になったりすることもありましたが、皆さんの細かい配慮のおかげで神戸女学院大学での留学生活を楽しく過ごせるようになりました。いつも笑顔で迎えてくれた寮の先生方、困ったことがあると積極的に助けてくれた国際交流センターの方々、日本での生活に馴染めるよう助けてくれた留学生バディや、寮生の方々。皆さんのおかげでより楽しい交換留学生活を過ごせました。ここで過ごした半年は、3年間の大学生活の中で一番幸せだった期間でした。韓国に帰っても神戸女学院大学での思い出は、一生心の中に残したいと思います。

学生の活動紹介

第2回 A O-K Speech Contest (大阪・神戸 米国総領事館主催 スピーチコンテスト) 2位
文学部 英文学科 3年生

内閣府 Global Leader 育成事業参加
文学部 総合文化学科 3年生

第14回 大阪国際音楽コンクール
大学生部門 歌曲コース エスポワール賞
音楽学部 音楽学科 4年生 (声楽専攻)

第23回 日本クラシック音楽コンクール
全国大会 第4位
音楽学部 音楽学科 4年生 (ピアノ専攻)

第5回 東京国際声楽コンクール
大学生部門 第5位
音楽学部 音楽学科 4年生 (声楽専攻)

第5回 グレンツェンピアノコンクール
全国大会 大学・一般の部 準優秀賞
音楽学部 音楽学科 4年生 (声楽専攻)

日本クラシック音楽コンクール
全国大会打楽器部門 4位 (部門最高位)
音楽学部 音楽学科 4年生 (打楽器専攻)

第4回 クオリア音楽フェスティバル
大学生部門 第1位
音楽学部 音楽学科 3年生 (ピアノ専攻)

第7回 ベーテン音楽コンクール
大学・院生A部門 全国大会ベスト20賞
音楽学部 音楽学科 2年生 (ピアノ専攻)

第30回 愛知ピアノコンクール
大学・一般部門 銀賞
音楽学部 音楽学科 2年生 (ピアノ専攻)

ピアノ・声楽コンクール in OSAKA
大阪府知事賞 (第1位)
音楽学部 音楽学科 2年生 (ピアノ専攻)

第19回 KOBE 国際音楽コンクール
優秀賞+兵庫県文化芸術協会賞
音楽学部 音楽学科 4年生 (ピアノ専攻)

第19回 KOBE 国際音楽コンクール 優秀賞
大学院 音楽研究科 2年生 (ピアノ専攻)

第19回 KOBE 国際音楽コンクール 奨励賞
音楽学部 音楽学科 3年生 (ピアノ専攻)

第19回 KOBE 国際音楽コンクール 奨励賞
大学院 音楽研究科 2年生 (ピアノ専攻)

研究所活動報告

講演会

〈前期：2013年6月7日〉

「プラトンの問題と先天的言語能力」

栗栖 和孝 英文学科准教授

Noam Chomsky は、人間が言語習得のための普遍的な仕組みを先天的に備えており、生後の言語体験によって母語体系が完成されるという仮説を提唱した。

上記の仮説は、人間が完成された言語体系を獲得した状態で生まれるとする仮説と人間の言語体系が生後の言語体験のみによって獲得されるとする仮説の双方が誤っていることから導かれる。

人間が完成された言語体系を獲得して生まれると考えた場合、生後すぐの幼児が言語を産出できない事実や大人の発話を完璧に理解できない事実が説明できない。更に、生後の言語体験によって言語能力が拡大しないとすれば、世界に存在する数千の言語を獲得した状態で生まれなければ困る。生後どのような言語環境で生活するか分からないからである。これも現実に反していることは自明である。

次に、生後に聞いた言葉を暗記するのが言語獲得であると考えた場合も多くの矛盾が生じる。第一に、有限の言語体験から無限の言語生成能力を生み出すことは不可能である。第二に、様々な側面で脳の個体差があるが、なぜ言語の獲得において決定的な個体差が生じないのかが説明できない。第三に、大人の発話には文法的な誤りが含まれるが、それを聞いた幼児が正確な文法を獲得する理由が説明できない。以上のような矛盾を総称してプラトンの問題と呼ぶ。

Noam Chomsky の仮説では、発話の背景にある抽象的な法則を習得することを言語獲得と捉えるため、無限の発話の産出が可能になる。また、生後の言語体験に依存する部分が少ないため、言語獲得において圧倒的な個人差が生じないと考えられる。更に、普遍的言語知識に自然言語の可能な範疇が指定されていると考えることによって、文法的に誤った発話を聞いても正確な文法体系を身に付けることが可能であると考えられる。以上のように、先天的言語能力と後天的言語体験を併用することによってプラトンの問題は解決される。

〈後期：2013年11月8日〉

「紛争と音楽」（1990年代 旧ユーゴの場合）

ボスニア史専門家 清水 美穂 氏

研究所総会研究発表

〈前期：2013年6月28日〉

「調整的音楽療法（RMT）の心身への効果について」

國吉 知子 心理・行動科学科教授

調整的音楽療法（Regulative Musiktherapie：RMT）とは、ドイツの Schwabe C. により開発され、1980年代に村井靖児が日本に導入した受動的音楽療法である。RMT では、クラシックの指定楽曲を約10分間聴取する間、自らの意識（注意）を「思考」「身体」「音楽」の3領域に偏りなく向け続けることで、物事にこだわる傾向など「誤った緊張」を調整していく。参加者は、RMT における意識の使い方（意識の振り子）を習得することを通して、あるがままの態度を形成し「受動的観察力」を高め、症状改善に至る。ドイツでは RMT は音楽を用いたメンタルヘルス法として用いられているが、残念ながら、これまで日本で RMT は普及してこなかった。その原因として、10週間（週2回）にわたる継続実施が必要であること、意識状態のトレーニングとも言える RMT の内的状態が理解されにくいことなどが挙げられ、国内の RMT 継続研究者はごく少数である。

筆者は2004年から RMT の研究を続けてきたが、これまでの調査から、不安低減、気分改善、身体意識や自己覚知の高まり、とらわれのない態度、意識のひろがり、対処能力の増大など、RMT による様々な効果が示されてきている。今回の発表では、RMT の具体的な方法について解説するとともに、実際に音楽を流し RMT 体験の時間を持った。さらに、唾液中コルチゾール値を指標に用いての RMT によるストレス緩和効果、不安やうつ傾向と関連の深い「自己注目」傾向の改善効果、RMT とマインドフルネスとの類似性など、筆者による最近の RMT 研究についての報告をおこなった。（なお、今回紹介させていただいた研究の一部は、本学人間科学部研究助成（2010年～2012年）を受けて実施しました。唾液分析にあたっては、人間科学部 高岡素子教授の協力を得ました。この場を借りて改めて御礼申し上げます。）

〈後期：2013年12月6日〉

「大手拓次の詩による6つの歌曲」

司会：斉藤 言子 音楽学科教授

ソプラノ：樺田 真須子 音楽学科非常勤講師

作曲・ピアノ伴奏：澤内 崇 音楽学科教授

専門部会研究発表会

1. 総合文化学科 2013年6月7日
「協同学習ワークショップ～LTDを中心に」
古庄 高 教授
2. 環境・バイオサイエンス学科 2013年6月18日
「スウェーデン留学報告」
高岡 素子 教授
3. 音楽学科 2013年6月19日
「20世紀におけるフルート作品の発展」
ラック ザビエル 専任講師
4. 英文学科 2013年6月27日
「英語でのユーモアと日本語でのユーモアについて」
Goran VAAGE 専任講師
5. 英文学科 2013年11月13日
「日本における遠隔通訳」
奥村 キャサリン 専任講師
6. 総合文化学科 2013年11月29日
「ジャズ実践をめぐる社会学：
ベッカー、サドナウから辿る試み」
横田 恵子 教授
7. 心理・行動科学科 2013年11月29日
「禁煙行動は心理学的に予測できるか？」
小林 知博 准教授

専門研究会

1. 2013年6月1日
「スポーツと人権
—オリンピック・ムーブメントの歴史と現状から考える」
中京大学スポーツ科学部教授 来田 享子 氏
2. 2013年7月2日
「国際連合と平和維持活動
—人道介入の課題 ルワンダからシリア」
国連本部政務官 川端 清隆 氏
3. 2013年7月5日
“Globalization and East Asia: Perspectives from
China, Russia, Japan and the United States”
(グローバル化時代の東アジア：中国、ロシア、日本、米国の視座から)
Associate Professor Dr. Douglas A. Stiffler 氏

4. 2013年7月11日

「帝国主義と天皇制

—日米世紀転換期のトポグラフィ—」

Associate Professor Robert Tierney 氏

5. 2013年7月17日

“My Research Career of Japanese Studies”

(日本研究の私のあゆみ)

Associate Professor Millie Creighton 氏

6. 2013年7月19日

移民問題と国際関係：日本と日本人の課題

“Migration and International Relations:

A Homework for Japan and the Japanese”

国際移住機関 (IOM) 駐日事務所

プログラム・マネージャー 橋本 直子 氏

7. 2013年10月9日

「古琴の世界から見た文化のあり方」

中華民国 國科會人文社會研究中心

研究員 陳 貞竹 氏

8. 2013年12月18日

「イラク・アフガニスタン

～私が取材で出会った女性たち～」

アジアプレス所属

フリージャーナリスト 玉本 英子 氏

9. 2014年1月14日

“Processes of Early Language Acquisition in

Children with ASD (Autism spectrum disorder):

Comprehension Matters”

University of Connecticut Professor

Letitia Naigles 氏

助成・補助

出版助成	4件
研究助成	9件
総合研究助成	4件
研究補助	3件
研究成果配布補助	14件
専門研究会補助	9件
国際学会出張補助	5件

発行物

『論集』第60巻第1号 (通巻第170号) 2013年6月発行

『論集』第60巻第2号 (通巻第171号) 2013年12月発行

(研究所)

女性学インスティテュート活動報告

特別講演会

日時：2013年5月17日(金)

「女性の自立と幸せのために

～国際条約をもっと活用しましょう～」

ワーキング・ウィメンズ・ネットワーク (WWN)

代表 越堂 静子 氏

連続セミナー（全4回）

「性を売る女、買う男」

〈第1回〉2013年6月14日(金)

「聖書に登場する売春女性たち」

中野 敬一 文学部総合文化学科 准教授

〈第2回〉2013年6月21日(金)

「売買春の日本近現代史」

河西 秀哉 文学部総合文化学科 専任講師

〈第3回〉2013年6月28日(金)

「売春防止法と風俗営業法の共存」

米田 眞澄 文学部総合文化学科 教授

〈第4回〉2013年7月5日(金)

「戦後日本の性風俗の買春防止法」

景山 佳代子 文学部総合文化学科 専任講師

女性学インスティテュート主催 公開上映会

日時：2013年10月16日(水)

「311：ここに生きる—IN THE MOMENT—」

監督：我謝 京子 氏

映画上映

我謝監督と本学学生による質疑応答

学生懸賞論文（第15回女性学インスティテュート賞）

3編応募。最優秀賞1編。優秀賞1編。

最優秀賞：2013年3月人間科学部卒業生

「女性同（両）性愛者のコミュニティ参加は精神的健康・自尊心にどのような影響を及ぼすか—面接法と質問紙調査法による検討—」

優秀賞：2013年3月文学部卒業生

「＜男装の少女＞のセクシュアリティ—少女マンガ世界におけるジェンダー表象—」

授業

Cu134(1)(2)「女性学（実践編）」

Cu234(1)(2)「女性学（理論編）」

いずれも講師4名によるオムニバス形式

インターディシプリナリープログラム

1名修了。

発行物

『女性学評論』第28号（2014年3月発行）

「ニュースレター」No.55（2013年10月発行）

「ニュースレター」No.56（2014年3月発行）

（女性学インスティテュート）

<私の研究>

Research Statement

Shawn BANASICK



My main research focus remains on the U.S. military base issues in Okinawa, and their effect on U. S. -Japan relations. Specifically I am continuing my research into the spatial metaphors used in security discourses associated

with the U.S. military base controversies. The goal of this research is to understand the links between national, regional, and local-level security discourses in the context of the rapidly changing East Asian security situation. I hope to visit Nago city again this year to investigate local reactions to the Japanese government's plans to push ahead with the redevelopment of the Henoko area as part of the agreement to close the U.S. Marine Corps base in Futenma.

In connection with this research I became interested in methodological issues, and as a result I have integrated Q methodology into my recent work. Q methodology is a relatively unknown technique, but one which offers considerable benefits for researchers interested in understanding people's attitudes and opinions in regards to a specific topic. Unlike a traditional survey, which provides separate, isolated pieces of information, a Q methodology-based research project can provide a holistic understanding of the respondents' perspectives on a research topic. I am currently developing a software program for Apple's iPad tablet that would help to overcome some of the difficulties associated with Q methodology and make it easier to use in the field.

(英文学科教授)

見えない“ところ”をどう伝え合うか

木村 昌紀



私は、「コミュニケーションの心理学」を研究しております。日常生活で、私たちは“ところ”をどのように伝え合うのか。一言で答えるなら、目に見える、かたちのある手がかりを用いて、目に見えない、かたちのない“こ

ろ”を伝え合っています。手がかりには、ことばはもちろん、表情や視線、しぐさなど様々なものがあります。うまくいかずに、誤解が生じることもしばしばです。私は、このようなコミュニケーションの心理メカニズムに関心があります。

現代社会の変化の中で、人と人との関わりの難しさや複雑さがあらためて注目されています。国際交流では、普段の伝え方では相手にうまく伝わらないことが起こります。新しいコミュニケーション・ツールは、便利さの反面、特徴を理解して使いこなさないと、思わぬ落とし穴があります。雇用形態の変化で短期的な関わりや一時的な関わりが増えていきます。これまでなら時間をかけて何度もやりとりしていたところを、今は少ないやりとりでうまく伝え合わなければいけません。これらの問題に成果を還元できたらと思います。研究に取り組んでいます。ここ数年、力を注いでいるのは、日本人と中国人のコミュニケーション比較です。従来の心理学の研究では、同じ東アジア文化として、両者をまとめて論じていました。実際に比べてみると、地理的に近く、外見も似ているがゆえに、違いに驚かされることがあります。円滑な交流方法を探るため、両者の共通点と相違点を検討しています。

身近なテーマなので、学生の関心も高いように思います。人と人の関わりを学び、自分自身も人と関わりながら学ぶ、その楽しさを学生たちと一緒に共有していきたいと考えております。

(心理・行動科学科専任講師)

<課外活動紹介>

[クラブ]

学生YMCA

部長

学生 YMCA は、2012年から東日本大震災復興支援ボランティアとして、夏休みを利用して、石巻YMCA へ5、6人で行っています。ボランティアの内容は被災者の心のケアを中心としたもので、仮設住宅での交流会（東北の方言でのお茶っこ）や、小学校の放課後児童クラブで子どもたちの遊び相手となることです。現地では、石巻YMCA 駐在の方に案内していただき被災地を視察します。被災地の現状を自分の目で見ること、復興支援における現状と課題が明らかになると考えます。学生YMCA が参加している地球市民プロジェクトとは、世界中のYMCA から参加者が集まり、世界のあらゆる問題について議論し、考えをシェアする日本YMCA 主催のプロジェクトのことです。8月に6泊7日で行われ、コミュニケーションやディスカッションは全て英語でなされます。有志での参加により、2012年に引き続き2013年も一人の学生が参加しました。ボランティアについての意識が高まるだけでなく、多様な切り口からの刺激を受けるので、現代社会が抱える様々な社会問題に向き合える良い機会になります。

定期的に関西学院大学YMCA や京都大学YMCA での聖書研究会に参加しており、他大学との繋がりががあります。現在学内ではエコキャップ運動を続けています。ペットボトルのキャップを約800個集めると、子ども一人分のポリオワクチンを購入できるというもので、昨年度は前期と後期を合わせて約12000個が集まりました。2014年は、釜ヶ崎（大阪市西成区）での炊き出しボランティアに挑戦していきたいと考えています。



2013年度夏 YMCA 石巻支援センター前にて

[クラブ]

スキー&スノーボード部

部長

私たちスキー&スノーボード部は、現在10名が在籍しています。活動のメインは、春休みに行く合宿です。合宿ごとに、スキーまたはスノーボード、いずれかを選ぶことができるため、在籍中に両方を楽しむことができます。

昨年度の合宿は、2月4日から8日にかけて、新潟県赤倉温泉で行いました。スノーボードの初心者、スキー初心者、経験ある部員から滑り方やコツを学びました。一方、上級者の中には、日本一急と言われる坂を滑る人もいました。このように合宿は、あくまでも、個人のレベルに合わせて楽しむことを目的にしています。そして宿では、楽しく夕飯を食べたり、疲れた体を温泉で癒したり、また、ガールズトークで盛り上がりたりして、昼間の疲れを忘れさせてくれる楽しい時間を過ごしました。学年や学科の異なる部員たちですが、合宿を通じて友情が深まり、部の結束も強くなりました。

今年度の合宿は、3月に長野県の白馬五竜で行います。この合宿では、スノーボードに挑戦する人が増えたので、スクールの時間も昨年より長くする予定です。スキーをする人は経験者のみとなり、より高度な技術を身につけようとやる気に満ちあふれています。今年度の合宿も例年同様、有意義なものとし、個人としても部全体としても、更に成長することを目指しています。来年度の合宿は、みなさんの参加をお待ちしています。



合宿にて

中高部報告

冬の修養会

釜ヶ崎訪問で感じたこと、考えたこと

高等学部 2年生

「野宿者の方は決してハウスレスなのではなく、ホームレスなのだ。」という言葉聞いたことがあります。この場合の「ホームレス」とは、ただ中で住むことができる家がないのではなく、人との会話であったり交流であったり、人とつながることから疎遠になっているのです。

いこい食堂の炊き出しは、釜ヶ崎でくらす方々にとって何かあたたかみのあるものになっているのだと感じました。もちろん食料を共有するという面でもそうですが、それ以上に、炊き出し中に少し言葉を交わすことや、ちょっとした気遣いに大きな意味があるのだと思いました。私がこう強く感じたのは、おにぎりを受け取ってくださった方が笑顔を見せてくれた時でした。おなかを満たすことだけでは終わらない炊き出しの意義を見た気がしました。

科学技術の発展にともなって、人と気軽につながりすぎているということが問題になっている今、ますます社会に格差ができています。そして弱い立場におかれた人の声が、またそういう人々を支えようとする声が、社会に届かなくなっています。ですから自分からこの問題、現状を知ろうとしなければいけませんし、知った者は積極的に考えなければいけません。一人一人がこの問題を他人事とせずに考える必要があると思います。今回この釜ヶ崎訪問に参加する機会が与えられたことに心から感謝しています。ぜひ参加したことのない方には行ってもらいたいです。きっと予想以上に得られるものがあると思います。

冬山スキー

12月21日～25日に冬山スキーが行われました。生徒45名、引率教諭7名が参加しました。初めてスキーをする生徒や、上級コースもスイスイ滑れる生徒などさまざまです。技術レベルを6班に分け4日間、講習を行います。休憩の時間には、雪合戦をしたり、雪だるまを作ったりと普段できない遊びを楽しみました。

熊の湯までバスで移動した日は、吹雪いており、強烈な寒さでしたが、標高2,307mにある雲上の宿横手山頂ヒュッテのパン屋まで行くことを目標に、各班協力して頑張りました。冬山スキーに何回も参加しているという上級生が、下級生に色々教える場面も見られました。24日の夜はクリスマス礼拝を守りました。祝会ではS2の生徒が中心にゲームなどを考えてくれ、大いに盛り上がりました。今年も、サンタとトナカイが登場し、プレゼントを皆に配ってくれました。皆で楽しい時間を過ごすことができました。

講習中も怪我などなく、行程表通りにスムーズにいくことができました。冬山スキーに関わったすべての方々に感謝いたします。

(冬山スキーディレクター)

<先輩からのメッセージ>

悩んだときには

～私の経験から皆さんに伝えたいこと～

2000年度中高部卒業生

私は今、大阪で弁護士をしています。仕事は大変ですが、最後に依頼者から感謝の言葉をいただいたときは、大きなやりがいを感じます。

中高部時代は、色々と悩むと思いますので、私が在校生の頃に悩んだ時のことを書きたいと思います。

私は、S2の夏から1年間、米国に留学させていただきました。今となっては、留学して良かったと思いますが、留学を決心するまでの間は、中高部時代で一番迷いました。1年間受験勉強が遅れるリスクを冒してまで、留学する必要があるのかと悩んでいました。しかし最後は、チャンスはいつもあるとは限らないと思い、留学を決心しました。

悩んだ末の留学でしたが、語学力だけではなく、多くを得たように思います。留学先では違った文化や考えに毎日さらされますので、自然と自分の違うものをそのまま受け入れられるようになりました。また、ホストファミリーや友人には恵まれましたが、日々の困難に一人で立ち向かえたことで、少し自分に自信ができました。

結局、受験浪人をしましたが、留学で得た多くの宝物に比べれば、1年間の回り道は取るに足らないものに思えました。

皆さんは若く、才能に溢れています。目の前の小事にとらわれることなく、与えられた才能を開花させる準備をしてください。小さくまとまらないでください。興味のあることには臆せず挑戦してください。神戸女学院は、皆さんが寄り道をしながら色々な経験をするのを温かく見守ってくれるでしょう。

自分の心に正直に

数野 純子

(中高部、神戸女学院大学文学部英文学科卒業)

私は現在、事務機器メーカーで外資系企業を担当する営業として働いています。英語を使って日本人でないお客様と交渉、提案し、海外の関係者と連携する機会も多い仕事です。

学生のころには今の仕事に就いているとは想像も及びませんでした。ただ、私はいつも日本と海外の架け橋になりたいという思いでいました。この原点は高等学部2年生のとき、KCCを通して米国へ1年間留学する機会を与えていただいたことです。多くの人と英語でコミュニケーションすることの楽しさを実感し、もっと視野を広げて世界に羽ばたきたいと思いました。当時は、外交官やアンカーウーマンなど、華々しい職業に憧れていました。その後、大学で学んだ国際関係論にとっても興味をひかれ、研究者として生きる道を考え、修士課程に進みました。このような紆余曲折を経て、今の私がいます。初心はどこへ、と思われるかも知れませんが、現在の仕事はリエゾンの役割が多いので、不思議と思いは繋がってきたようです。

世界に羽ばたくためには、私はまだ道半ばです。それでも、自分の心の声に従って進めば、その先にまた新しい道が開けると 생각합니다。

3月は旅立ちと変化の時。皆さんも卒業や進級を控え、将来について考えられているタイミングかも知れません。迷いや悩みがあるとき、自分の思いを大切にしてください。一番大切な答えは皆さんひとりひとりの心の中にあると思います。皆さんのご活躍をお祈りしています。

第48回クラブ部長賞 第29回文化・スポーツ賞

今年度クラブ部長賞は2013年12月20日(金)の2学期終業日に表彰が行われ、JとSの3クラブずつ計6クラブが受賞されました。受賞クラブには表彰状と盾、副賞が贈呈されました。

文化・スポーツ賞は2014年1月16日(木)に表彰が行われ、受賞者には中高部部長 森先生から表彰状とメダルが贈呈されました。文化・スポーツ賞は、学校代表として各大会等へ参加し、顕著な成績をおさめた団体、個人に授与されるものです。賞の基準は西宮・阪神地区で第1位、兵庫県・近畿・全国で第3位以内とするものであり、選考委員で審議し受賞者をそれぞれ決定しました。

クラブ部長賞、文化・スポーツ賞は、生徒のクラブ活動や、学校生活での活性化を願い、生徒の努力を称えることが目的であります。来年度もたくさんの受賞者が選出されることを願っています。

施設課の方には講堂のステージを始め、表彰式にふさわしい会場を設営していただきました。有難うございました。

第48回部長賞

J コーラス部・J 軽音楽部・J バレーボール部
S 書道部・S テニス部・S バレーボール部
以上6クラブ

個人情報保護のため、
55ページ目から
56ページ目左段は
一部削除しています。

第29回文化賞 (28名)

☆第29回成田山全国読書大会 成田山賞 (第3位相当)

読売賞 (第3位相当)

☆第58回青少年読書感想文全国コンクール 全国学校図書館協議会長賞

☆兵庫県私立高校第9回英語スピーチ・コンテスト 第3位

☆第18回全国高校大学生書道展 書道展賞
優秀賞

☆第8回全国高校生英語ディベート大会 in 長野
優勝

※世界大会へ出場します

最優秀ベストディベーターとして文部科学大臣賞を受賞

☆第8回東京大学 ESS 杯争奪英語弁論大会 第3位

☆2013阪神 ESS ユニオンシナリオリーディング・コンテスト 第1位

☆第2回 EF Grand Prix 英語コンテスト 第3位

☆第5回 IIBC TOEIC エッセイ・コンテスト 最優秀賞

☆第1回全国高校生英語スピーチ・コンテスト
VVV-Venlo 賞

☆広島女学院大学ゲーンズ杯高校生英語スピーチ・コンテスト2013 第2位

☆第60回高等学校英語弁論大会 第1位

☆日本倫理・哲学グランプリ 銅賞

☆第16回兵庫県高校生英文エッセー・コンテスト県
大会 優秀賞

☆税の書道展 西宮・宝塚租税教育推進協議会賞

西宮納税貯蓄組合連合会賞

☆第46回私学の書展 特選大阪教材社賞

☆第12回鳳凰杯中学生英語スピーチ・コンテスト
第2位

☆パシフィック杯第2回中学生英語暗唱コンテスト
優勝

☆中学生の税の作文 西宮・宝塚租税教育推進協議
会賞

☆兵庫県私立中学第9回英語レシテーション・コン
テスト 第1位

☆数学・理科甲子園ジュニア 科学の甲子園ジュニ
ア全国大会 兵庫県予選準優勝 全国大会総合第
2位

第29回スポーツ賞 (11名)

☆西宮市民大会 ダブルス優勝

☆第57回兵庫県中学校総合体育大会テニス競技 団
体の部第3位

(中高部生徒課教諭)

2014年度中学部入学試験について

日程：2014年1月18日(土)・20日(月)

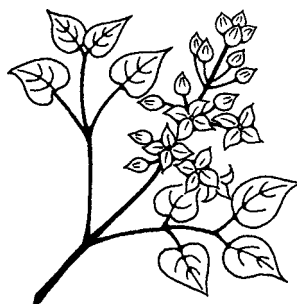
募集人員	志願者数	受験者数	合格者数	手続完了者数
135	214	211	153	143

2014年度中高部転・編入学試験について

日程：2014年1月28日(火)

	志願者数	受験者数	合格者数	手続完了者数
転入学	1	1	1	1
編入学	1	1	1	1

(中高部事務室)



全国高校生英語ディベート大会 初出場初優勝

2013年12月14日、15日に松本市で開催された第8回全国高校生英語ディベート大会（論題「日本はコメの輸入関税を撤廃すべきである。」）に、高等学部2年生の4名が、兵庫県代表校チームとして出場しました。64校による予選リーグ戦では、初戦には負けたものの4勝し、決勝トーナメントに進出しました。そしてその後も勝ち上がり、遂に体育館の舞台上で決勝戦に臨み、大勢の前でも臆することなく理論と英語力を武器に堂々と試合を展開して、初優勝しました。表彰式では、チームに文部科学大臣賞、優勝旗が授与され、チームの内1名は、6人のベストディベーターの中でも最優秀として表彰されました。

4人が有志ディベートチームとして活動を始めたのは一昨年の夏で、その後、練習会などで他校の経験者や指導者の助言を受けつつ、ほぼ独力で綿密な資料集めをし、理論の立て方の研鑽を積んできました。2013年8月の第18回全国中学・高校ディベート選手権で、ベスト8に進出した体験も役立ったようです。メンバーがそれぞれの個性によく合った役割を分担し、信頼して助け合ったことが勝利につながりました。論題を多角的にとらえ、相手のいうことをよく聞き、自分の主張を、相手や聴衆によく伝えるよう、冷静にわかりやすく述べるという、本来のディベーターの姿にも近づいていけたと思います。4人の精進と活躍に敬意を表し、心から誇りに思います。

（英語科 有志ディベートチーム顧問）



<課外活動紹介>

[クラブ] Jバスケットボール部

部長

私たちJバスケットボール部は、J1が4人、J2が4人の少人数で活動しています。人数上、どんな練習メニューもできるわけではありませんので、協力し合いながら一つ一つの練習を丁寧にこなしています。バスケットボールはチームプレイなので、仲間との絆も深まります。練習中にできなかったところはお互いに注意し合って直していき、ミスをしてしまったらカバーし合っています。仲間と協力しながら技術を高め、絆を深め合い、成長していくことを目標に、毎日練習を頑張っています。

[クラブ] J家庭科研究部

部長

私たちJ家庭科研究部は、裁縫・調理を中心に月・火・木の週3回活動しています。主にバザーや文化祭などの行事に向けての準備を行い、余裕がある時に部員全員で相談し合ってメニューを決めて調理を行います。その他にも、毎年クリスマスに施設の子どもたちへ手作りのプレゼントを贈っています。失敗すること多々ありますが、その度反省を活かして上達することができていると思います。部員皆で仲良く一つ一つの目標に向かっていける楽しいクラブです。



[クラブ]

S 競技かるた部

部長

「競技かるたって何？」まずそう思われる方が多いのではないかと思います。競技かるたは畳上のスポーツと言われ、忍耐力、記憶力、瞬発力といった普通のスポーツと変わらない能力を必要とする競技です。

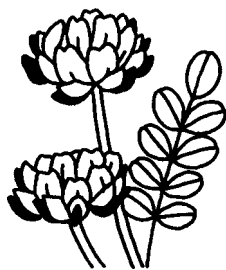
最近では競技かるた人口が増え、試合の参加者が例年の5倍になるなど、会場におさまりきらないほどです。これからも部長として、競技かるたの虜になった者として、多くの人に競技かるたの魅力を伝えていきたいです。競技かるたに興味のある方はぜひ競技かるた部にお越しください。

[クラブ]

S 化学部

部長

S 化学部は、週に約2回の活動を通して、部員同士で持ち寄った様々な実験をしています。手持ちの資料や薬品を使って試行錯誤しながらの実験はうまくいかない事も多いですが、その分、成功した時には大きな喜びを感じます。昨年の文化祭では、例年の展示やスライム体験に加えて実験ショーにも取り組みました。準備も直前までかかり大変ではありましたが、たくさんのお客さんに来ていただきました。部員の多くが他にも係りを担当していて忙しいため、細々とした活動ではありますが、気軽に好きなことをしながら楽しく活動しています。



〈学 院 日 誌〉

1月8日(水)	中高部始業日 中高部教員会議	2月19日(水)	中高部教員会議
1月17日(金)	教授会	2月20日(木)	文学研究科春季入学試験
1月18日(土)・19日(日)	大学入試センター試験	2月20日(木)～21日(金)	人間科学研究科春季入学試験（博士前期課程、博士後期課程）
1月18日(土)・20日(月)	中学部入学試験	2月26日(水)	理事会
1月22日(水)	理事会 中高部教員会議	3月3日(月)	高等学部卒業式
1月29日(水)	文学部・人間科学部一般入学試験 (前期A日程)	3月4日(火)	文学部・人間科学部一般入学試験 (後期日程)
1月29日(水)～31日(金)	音楽学部一般入学試験（前期A日程）	3月5日(水)	中高部教員会議
1月30日(木)	文学部・人間科学部一般入学試験 (前期B日程)	3月7日(金)	教授会
2月5日(水)	中高部教員会議	3月19日(水)	大学卒業式、大学院修士学位記授与式 中高部教員会議
2月12日(水)	文学部・人間科学部一般入学試験 (前期C・D日程)	3月20日(木)	中学部卒業式、中高部終業式
2月14日(金)	教授会	3月21日(金・祝)	オープンキャンパス
		3月26日(水)	理事会 評議員会 臨時理事会

目

神戸女学院の真価が問われている	1
クリスマス報告	3
KCC だより	5
2014年度年間標語	7
退職のことば	7
新刊紹介	14
その他の新刊一覧	15
秋季公開講座報告と春季公開講座のお知らせ	15
史料室の窓・キャンパス探訪（4）	16
人事・慶弔・栄誉	17
オフィスの宝物	18
大学報告	
自己PR 全員面談	19
学生寮音楽学部生有志によるチャリティーコンサート	19
舞踊専攻第5回卒業公演	20
かいま見る通訳の世界	20
Assumption College と交換留学協定を締結！	21
第38回神戸女学院大学英語英文学会（KCSSES）大会報告	21
音楽学部定期演奏会報告	22
2013年度文学部卒業論文題名	23
2013年度音楽学部卒業演奏会演奏曲目	35
2013年度人間科学部卒業論文題名	37
2013年度文学研究科博士論文題名	42

次

2013年度文学研究科修士論文題名	42
2013年度音楽研究科修了公開試験曲目	42
2013年度人間科学研究科博士前期課程・修士論文題名	43
先輩からのメッセージ	44
2014年度大学入試結果(中間2/20現在)報告と概要	45
2014年度夏期語学研修参加者募集	45
受入れ留学生報告	46
学生の活動紹介	47
研究所活動報告	48
女性学インスティテュート活動報告	50
私の研究	51
課外活動紹介	52
中高部報告	
冬の修養会 釜ヶ崎訪問で感じたこと、考えたこと	53
冬山スキー	53
先輩からのメッセージ	54
第48回クラブ部長賞、第29回文化・スポーツ賞	55
2014年度中学部入学試験について	56
2014年度中高部転・編入学試験について	56
全国高校生英語ディベート大会初出場初優勝	57
課外活動紹介	58
学院日誌	60